三重縣護國神社奉賛会報

第百一号

令和四年度
三重縣護國神社奉賛会

『英霊遺徳顕彰祭及び総会』について

会員各位のご協力・ご奉賛をいただきまして、令和三年度も恙なく終了できましたこと、心より御礼申し上げます。

令和四年九月一日より新年度に入りました。

さて、当奉賛会では、例年この時期に総会を開催しておりますが、昨年同様に新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、総会を書面表決とさせていただきます。会員の皆様につきましては別紙書面表決資料をご確認の上お手数ですが返信葉書に各議案の賛否を記載いただき、ご署名・捺印の上令和四年十月三十一日必着にて返信をお願いいたします。

議案の可決につきましては、返信いただいた書面表決書のうち賛成が過半数を超えた場合に可決とさせていただき、春の社報の発送とともに会員の皆様に報告させていただきます。何卒ご理解いただきますようお願いいたします。

また、総会に合わせて斎行している奉賛会英霊遺徳顕彰祭については神職のみで斎行していただきます。

奉賛会からの御案内

三重縣護國神社奉賛会では、次のとおりお願いしています。

新年度『令和四年度』（令和四年九月一日～翌年八月三十一日迄）に入りましたので、新年度会費を納入頂きますようお願い申し上げます。

尚、納入の際は奉賛会専用の振込用紙をご利用下さい。

※送金手数料は奉賛会で負担致します。

年度会費　正会員　二千円
　　特別会員　一万円

※入会ご希望の方は直接神社へお越し頂くか、奉賛会事務局までお知らせ下さい。

［問い合わせ先］
三重県津市広明町三八七
三重縣護國神社内　奉賛会事務局
TEL　〇五九-二二六-二五五九

【ご帰幽】

乙部　一巳　名誉会長
（享年八十九歳）

平成三年から平成二十八年までの二十五年間会長、その後名誉会長を務められた。

ご逝去を悼み
謹んでお悔み申し上げます。

新型コロナウイルス感染症と『死者の弔い』『死者を弔い続けること』について

奉賛会事務局
三重縣護國神社　権禰宜
高山広史

新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し三年が経とうとしています。政府や自治体のいう「不要不急」の定義が曖昧な中において、葬儀や墓参りといった『死者を弔うこと』『死者を弔い続けること』という日常当然の営みでさえも、コロナの以前のようには行えない状況が続いています。

昨年九月の当社「祖霊社」鎮座にあたり、三重タイムズ（本年六月一日ウェブ版）に取材を受けた際には、コロナの影響によりお墓や祖霊舎仏壇などの維持問題が加速的に顕在化し、『死者を弔うこと』『死者を弔い続けること』が困難になっている社会状況であってもなお、「亡くなった人（死者）の尊厳を守ることが現在生きている私達の幸せにつながるのではないか」との思いから、「祖先のおまつり」の大切さについて簡単に述べさせていただきました。

その思いを抱くきっかけになったのは、イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンが令和二年三月十七日にイタリアの新聞紙面に出した論説です。

その記事には、コロナで亡くなった人が葬儀すら行われること無く埋葬されるイタリアの現状について、〈死者―私たちの遺体―には葬儀の権利がなく、私たちの愛する人の遺体がどうなるのかは明らかではありません。私たちの隣人は抹消されました、そして教会がこのことについて沈黙しているのは不思議です。このような生き方に慣れてしまった国で、人間関係はどのようになるのでしょうか。そして、生存以外に価値のない社会とはなんでしょうか。〉と書かれていました。

生存は何よりも尊いことでありますが、『死者を弔うこと』も出来ず、ただ生存に価値を置く社会に対し、またそんな社会に所属する私たちに対し、アガンベンは批判を行ったのです。

これについては、当時イタリアのコロナの状況が深刻であったこともあり、賛否両論色々な意見が表明されましたが、私自身はこの記事を読み、『死者を弔うこと』『死者を弔い続けること』の重要性を感じさせられました。

そもそも『死者を弔うこと』『死者を弔い続けること』は過去から現在まで世界中の様々な宗教や方法で存在しています。死者を弔い、弔い続けることは『人間特有の歴史的な営み』であり、その大切さは国や宗教の枠を超えた共通の認識であると思います。

これは神社神道においても同じです。日本では、亡くなった人を神として祀る神社があります。御英霊を御祭神としてお祀りする靖國神社・護國神社はその最たる例でしょう。家庭においては祖霊舎に祖先がお祀りされ祭祀が執り行われています。死者は神として手厚く祀られ、祭祀を受けるのです。

『死者を弔うこと』『死者を弔い続けること』とは、死者の尊厳を守ることであり、その人がこの世界に存在したということの証明です。また、今を生きる私たちが、祖先を含め多くの死者の上に成り立っている証であり、それはいずれ弔われる立場になる私たちに帰することと考えられます。

アメリカのハーバード大学が七十五年の歳月を掛けて行った研究によると、「私たちの幸福と健康を高めてくれるのは良い人間関係である」という結果になったそうです。

幸せは社会の地位や名誉、貧富などとは関係なく、深い信頼関係を築いた人が自分のまわりにどれだけいるかが重要であり、つまり充実した人間関係の中で人は幸せを感じるというわけです。

亡くした人を弔うとき、弔い続けるとき、それは自分とその人との関わりの深さを再確認する契機となります。そして今を生きる私たちは、『死者を弔うこと』『死者を弔い続けること』により、日々の生活の中で深い人間関係を築くことがいかに大切かということを知るのです。それはまさに「亡くなった人（死者）の尊厳を守ることが現在生きている私達の幸せにつながる」ということに気づく瞬間ではないでしょうか。

このような考えは古くからありましたが、コロナ以前の日常では当たり前のこととして、意識される機会が少なかったのだと思います。コロナが流行し、人と人との距離が遠くなった今、改めて注目されるべき考えではないかと感じています。

人は皆いつか亡くなり、弔い、弔い続け、そしていずれ弔われる立場となります。

私自身、「人間万事塞翁が馬」のような世の中で、「終わり良ければ全て良し」ではないですが、人生の終わりには『深い信頼関係を築いた人』に傍にいて欲しいと願っています。

そして、三重縣護國神社の神職として、人々の幸福を祈願する立場として、御祭神である御英霊の護持奉斎はもちろんのこと、祖霊社や神葬祭の奉仕を通して、『死者を弔うこと』『死者を弔い続けること』を実践し、その尊厳を守っていかなければならないと考えています。